

令和8年4月17日  
一般財団法人林原美術館

## 購入及び受贈した刀剣類 20 口(ふり)を初公開

企画展「サムライたちの物語 一新収蔵刀剣と名品で紡ぐ時の声と美」  
会期:令和8年4月18日(土)～6月14日(日)

林原美術館(岡山市北区丸の内 2-7-15/館長:谷一 尚)では、4月18日より企画展「サムライたちの物語 一新収蔵刀剣と名品で紡ぐ時の声と美」を開催いたします。  
本展では、新たに収蔵した刀剣類 20 口を初公開いたします。これらは、2023 年度に購入した刀剣 19 口および拵 9 口、ならびに 2025 年度に寄贈を受けた 1 口(槍)からなり、いずれも調査を終えたのち、今回が初の一般公開となります。

購入品は、岡山ゆかりの三村元親や石川幸久をはじめとする地元戦国武将と刀鍛冶との関係性を今に伝える、きわめて貴重な作品です。これらの刀剣は、県内在住の愛刀家が所蔵していたもので、売却が検討されていました。一般的に、個人所蔵の刀剣が市場に出る場合、すべてが一括して引き継がれることは少なく、購入者の好みによって作品が選別されることで、結果として来歴や文脈を共有する作品群が散逸してしまうケースも少なくありません。また、いったん手放されると、再びまとまった形で集め直すことは不可能です。  
林原美術館では、岡山ゆかりの美術作品を適切に保管し、後世へと継承していくことを重要な使命の一つと考えています。今回、関連する刀剣をまとまった形で収蔵することにより、作品群としての価値と歴史的背景を保持したまま保存・公開することが可能となり、散逸を防ぐことができました。  
また、寄贈された槍は、拵に池田家の家紋である輪蝶紋が施されており、籠の中に忍ばせて護身用とした「御籠槍」であったと考えられます。

本展では、これら新収蔵の刀剣に加え、当館を代表する国宝「太刀 銘 吉房」をはじめとする一文字派の刀剣 6 口、後鳥羽上皇が名工を呼び寄せ一緒に製作したと伝えられる菊御作の太刀、さらには英国ウィンザー公旧蔵の「太刀 銘 信房」など、海外から里帰りを果たした名刀なども展示し、由来や逸話をご紹介します。

展示する作品は、刀剣 33 口(新収蔵 20 口含む)、甲冑 1 領、掛軸 10 点、卷子 3 点、屏風 2 隻、刀装具 4 件、合計 53 件です。

本展を通じて、作品が語りかける数々の物語に耳を傾け、サムライたちが生きた時代の息吹と、そこに込められた美をあらためて感じていただければ幸いです。

### 「林原美術館」について

林原美術館は、岡山城内堀のすぐ西側に位置しています。ここは、もともと岡山城二の丸屋敷の対面所(今でいう迎賓館)が置かれていた場所です。その後、明治時代には旧岡山藩主池田家の事務所が置かれるなど由緒ある地です。林原一郎氏(1908～1961) [林原(現:ナガセヴィータ)3代目社長]は、水飴製造業を発展させ、岡山の産業界を牽引する一方、東洋古美術に深い鑑識眼をもち、池田家の大名調度品を含む優れたコレクションを築きました。氏の没後、その志を継いだ遺族や知友の尽力により、1964年、当館は開館いたしました。

岡山城周辺の景観に調和した建物は、建築家・前川國男氏の設計による近代建築として高く評価されています。2024年には、本館・長屋門・3つの蔵が登録有形文化財に登録されました。私たちは、貴重な美術品と環境を活かし、文化と地域の発展に寄与することを目指して活動を続けています。